

# いのちの海と空と大地



原発のない世界を求めて ニュースレター

発行： 日本聖公会「正義と平和委員会」原発問題プロジェクト

## 「核のゴミ」問題の今

“「核のゴミ」の最終処分場をどこにするか”について、各地で議論されるようになってきたようです。これは大変好ましい事と思われます。特に北海道では、後志管内寿都町と神恵内村が「文献調査」を受け入れ、原子力発電環境整備機構（NUMO）がそれぞれの地域に現地事務所を設置して、地域住民の理解のための情報提供や「文献調査」を行なっています。

この「文献調査」は、手を挙げた自治体の地域が、使用済核燃料の最終処分場に適した土地であるのか、不適当な特性が認められないのか、地質学的な調査をするものです。決定するには更に、4年間の「概要調査」、14年間の「精密調査」を経て適当と判断されれば建設地として選定され、施設が建設されるということになります。それぞれの調査の結果を住民が理解し、納得するための時間を考えると早くとも20年を要することになりますが10万年の安全を考えるのですから長いとは言えません。（以下の情報は主に北海道新聞の記事をもとにしています）

## 寿都町と神恵内村の「文献調査」その他の活動の今

寿都町で2020年11月から始まった「文献調査」その他、地元住民との「対話の場」などの活動は、開始されて1年が過ぎ2年目に入りました。それぞれの町村において「調査」と「対話」が進められています。寿都町では12月14日に第5回「対話の場」がNUMO主催で開催され、委員16人中13人が出席しました。また、幌延深地層研究センター（12月2日3人）や青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場（12月4日4人）の視察も行いました。参加者は地層処分方法や「核のゴミ」と呼ばれる「ガラス固化体」がどのようにして生まれるかを知ることができたようです。一方、参加者からは「安心、安全の言葉が多く、逆に不安に感じた」、「賛否にかかわらず、見学してほしい」などの意見がありました。寿都町では2021年10月26日に町長選挙が行われ、「文献調査」の継続が争点となりましたが、推進派の現職町長が当選し「文献調査」の継続が決まりました。

一方、神恵内村も2020年11月より「文献調査」を受け入れ、NUMOによる調査が進められています。2021年11月に幌延深地層研究センターの視察を行いました。そして12月9日には5回目の「対話の場」会合を開き、住民との意見交換を行いました。NUMOは今後、対話の公明性確保のためにも住民から疑問や不安に関するアンケートを実施する予定です。2022年2月27日には村長選挙が予定されていますが、神恵内村は泊原発の隣の村でもあることから、当初から反対住民が少ないとも言われています。

両自治体とも、「対話の場」が開かれています。しかし、「処分場の建設を前提とするなら、参加できない」という意見も根強く、対話の深まりは進んでいないようです。特に寿都町では町長選挙で推進派が勝利しましたが、生まれた「分断」は根強く残ったままです。

## 長崎県対馬市「核ごみ最終処分」説明会

2021年11月23日長崎県対馬市にて経済産業省とNUMOによる説明会が開催されました。対馬市は2018年頃には年間41万人の観光客が韓国からやって来ましたが、元徴用工問題やコロナ禍の影響で現在ほとんどゼロになり、漁業を中心とする地域産業の衰退が激しく「文献調査」を受け入れることで財政の生き残りを図りたいとしています。対馬市商工会、山本博己会長（59）は「精密調査までなら進めてもいい」。地元の70代の男性は、「後継者もない町。核のごみを対馬に埋めても構わない」、対馬地区平和・労働センター書記の小島加津恵さん（68）は「被爆県の長崎県が核のごみを受け入れるなんてあり得ない」などの意見がありますが反対の声は十数年前より弱まっているとのこと。

## アイヌ民族も核ごみ反対 「先人が守った土地を汚さないで」

白老<sup>しらおい</sup>アイヌ協会理事長の山本和幸さん（73）ら15人は、道内の反対論が置き去りにされたままで調査が進んで行くことに危機感を強めています。埼玉から白老に移り住んだ宇梶静江さん（88）は「昔からアイヌモシリ（人間の住む大地）を敬い守ってきた。その土地が汚されたらどんなに悲しいか」と嘆きます。釧路市<sup>あかん</sup>阿寒町に住む演出家の秋辺デポさん（61）は「豊かな自然は次世代からの借り物、傷つけずに引き継ぐべきだ」と述べています。

## 宗教者が核燃料サイクル事業廃止を求める裁判（略称：宗教者核燃裁判）

裁判の原告団の中の有志（現在17名）が「北海道最終処分場問題 MTG」を結成して、「核のごみ」受け入れを拒否すべく北海道知事への申し入れを準備中です（2022年4月目標）。教派、宗派を問わず、宗教者として「いのち、倫理」の面からのインパクトある行動をしていきたいと考えています。（原発問題Pjメンバーの尾関が参加しています。）

## <識者の声>

### 石山徳子教授（49） 明治大学

「先住民族は土地を基盤にして生活や文化を培い、土地と深いつながりを持つ。今回、アイヌ民族が声を上げた意義は大きく、核のごみについての意見も、他の地域住民の意見と同様に耳を傾ける必要がある」

### 吉井美和子教授（64） 沖縄大学

日本の核のごみ処分候補地選定について

- \* 物事を決める人たちは首都圏に住んでいて東京から離れた場所ならOKらしい。
- \* 米軍基地が沖縄に集中している事と、日本全国から出る核のごみを北海道に押し付けることは同じ構図。
- \* 代わりにお金をあげるからというのは上から目線でしかない。
- \* 核のごみは埋めてはいけない。地中深く埋めてしまうと人は忘れてしまう。
- \* 倫理的に許されない。

「核のごみ」処分場について私たちが考えるべきことは、埋設した「高レベル放射性廃棄物」の10万年にわたる安全管理だけではありません。次号では、もう少し具体的に地元自治体が受ける影響について考えてみたいと思います。